

経 政

作 未詳 場所 山城国仁和寺 季節 九月 分類 二番目

シテ 平経政ノ霊 ワキ 行慶僧都

～あらすじ

琵琶の名手として名高い平経政。源平の合戦で命を落とした彼の為に、仁和寺にて法要が営まれる。法要を行う行慶僧都は、見え隠れする経政の気配に言葉を交わし、管絃を手向ける。ひとときの夜遊に心を和ませる経政だが、やがて修羅の苦しみに苛まれる姿を恥じ、燭の中に消えていくのであった。

～詞 章

ワキ「これは仁和寺御室に仕へ申す。僧都行慶にて候。侬も平家の一門但馬守経政は。未だ童形の時より。君御寵愛斜ならず候。然るに今度西海の合戦に討たれ給ひて候。また青山と申す御琵琶は。経政存生の時より預け下されて候。かの御琵琶を佛前に据置き。管弦講にて弔ひ申せとの御事にて候程に。役者を集め候。げにや一樹の蔭に宿り。一河の流を汲むことも。皆これ他生の縁ぞかし。況してや多年の御値遇。恵を深くかけまくも。忝くも宮中にて。法事をなして夜もすがら。平の経政成等正覚と。弔ひ給ふありがたさよ

地「殊に又。かの青山といふ琵琶を。彼の青山といふ琵琶を。亡者の為に手向けつ。同じく糸竹の聲も佛事をなし添へて。日々夜々の法の門貴賤の道も普しや貴賤の道もあまねしや

シテ「風枯木を吹けば晴天の雨。月平沙を照らせば夏の夜の。霜の起居も安からで。假に見えつる草の蔭。露の身ながら消え残る。妄執の縁こそ。拙けれ

ワキ「不思議やなはや深更になるまに。夜の燈火幽なる。光のうちに人影の。有るか無きかに見え給ふは。いかなる人にてましますぞ

シテ「われ経政が幽霊なるが。御弔ひのありがたさに。これまで現れ参りたり

ワキ「そも経政の幽霊と。答ふる方を見んとすれば。また消えいと形も無くて

シテ「聲は幽に絶え残つて ワキ「正しく見えつる人影の

シテ「有るかと思れば ワキ「又見えもせで シテ「有るか ワキ「無きかに シテ「かげろふの

地「幻の。つねなき身とて経政の。常無き身とて経政の。もとの浮世に帰りきて。それとは名のれども其の主の。形は見えぬ妄執の。生をこそ隔つれども我は人を見るものを。げにや呉竹の。笥の水はかはるとも。住みあかざりし宮の内。幻に参りたり夢まぼろしに参りたり

ワキ「ふしぎやな経政の幽霊形は消え聲は残つて。猶も言葉を交しけるぞや。よし夢なりとも現なりとも。法事の功力成就して。亡者に言葉を交すことよ。あら不思議の事やな

シテ「われ若年の昔より宮の内に参り。世上に面をさらすことも。ひとへに君の御恩徳なり。中にも手向け下さる。青山の御琵琶。娑婆にての御許されを蒙り。常は手慣れし四つの緒に

地「今もひかる心ゆゑ。聞きしに似たる撥音の。これぞ正しく妙音の誓なるべし。されば彼の経政は。さればかの経政は。いまだ若年の昔より。外には仁義禮智信の。五常を守りつ。内にはまた花鳥風月。詩歌管絃を専とし。春秋を松蔭の草の露水のあはれ世の心に洩る。花も無しころに洩る。花もなし

ワキ「亡者の為には何よりも。娑婆にて手慣れし青山の琵琶。各々楽器を整へて。糸竹の手向を進むれば

シテ「亡者も立寄り燈火の影に。人には見えぬものながら。手向の琵琶を調むれば

ワキ「時しも頃は夜半楽。眠を覚す折節に

シテ「不思議や晴れたる空かき曇り。俄に降りくる雨の音

ワキ「頻りに草木を拂ひつ。時の調子もいかならん

シテ「いや雨にてはなかりけり。あれ御覧ぜよ雲の端の

地「月に雙の岡の松の。葉風は吹落ちて。むらさめの如くに音づれたり。おもしろや折柄なりけり。

大絃は嘈々として。急雨のごとしさて。小絃は切々として。私語にことならず

第一第二の絃は。索々として秋の風。松を拂つて疎韻落つ。第三第四の絃は。冷々として夜の鶴の。子を憶うて籠の中に鳴く。鷄も心して。夜遊の別とどめよ

シテ「一聲の鳳管は

地「秋秦嶺の雲を動かせば。鳳凰もこれに愛でて。梧竹に飛び下りて。翼を連ねて舞ひ遊べば。

律呂の聲々に。情聲に發す。聲文を成すことも。昔を返す舞の袖。衣笠山も近かりき。面白の夜遊やあらおもしろの夜遊やあら名残惜しの。夜遊やな

カケリ

シテ「あら怨めしや偶々閻浮の夜遊に歸り。心を暢るをりふしに。また瞋恚の起る恨めしや

ワキ「先に見えつる人影の。なほ現るは経政か

シテ「あら恥かしや我が姿。はや人々に見えけるぞや。あの燈火を消し給へとよ

地「ともしびを背けては。燭を背けては。共に憐む深夜の月をも。手に取るや帝釋修羅の。戦は火を散らして。瞋恚の猛火は雨となつて。身にかれば拂ふ劔は。他を悩まし自と身を斬る。紅波は却つて猛火となれば。身を焼く苦患。恥かしや。人には見えじものを。あの燈火を消さんとて。その身は愚人。夏の蟲の。火を消さんと飛入りて。嵐と共に燈火を嵐とともに。燈火を吹き消して暗紛れより。魄靈は失せにけり魄靈の影は失せにけり